

宇宙は進化する

昔から、東洋でも、西洋でも、天文を研究する學者たちは、一生懸命に天體の運動を見、其の法則を發見しようと、努力したものでした。

勿論、星の運動を知る前に、星の配列を充分に辨へることが必要なものでありまして、それがために、大昔のバビロンの人々が、先づ星座を作つたのでしたが、しかし、只、星座を知るといふことだけでは、天文學でありません。それは單に人の趣味といふ以外には出ないのです。

美々しい星空を眺め楽しんでゐるうちに、個々の星が、恰も生きものの如くに動くといふことを知るのは、一の驚異でありますが、この驚異の情を押さえて、冷やかに、靜かに、星々の動き行く跡を追つて見ますと、そこには實に興味ある新事實が、だん／＼わかつて來ます。

すべての星は、一日に一回つつ、東から西へ、上から下へ、まるい道を進み

行きます。之れが日週運行です。ところが、このほかに、星々は、毎日の夕暮れに現はれるものも、又、早曉の空に現はれるものも、皆、一年中の四季の變遷と共に、交代します。之れが年週運行です。

それから、注意深く星の運動を見ますと、無數の星の中にあつて、極めて僅かな或る種の明るい天體だけが、單獨に、西へ、東へ、不思議な運動をするところが分ります。之れ等は、日月火水木金土の七つの天體で、其の運動は、實に不思議な、神秘的なものであるため、昔の天文家たちは、天文學の中心問題として、此等の七遊星の運動の正體をつかむために、永い間苦心慘嘆したものです。

幾百年も、幾千年も費して、東洋西洋の天文學者たちが、研究した結果、日週運動は、我が地球の自轉のために起る現象であり、又、年週運動は地球が公轉するために起るものであることが知れました。尙ほ、天體運動の中で、最も不可解な謎であると思はれてゐた遊星運動は、コペルニクや、ケプラーや、ニ

ウトン等の先哲たちの研究によつて、引力の法則により組織されてゐる太陽系の機構が知れて來ましたので、甚だ明瞭となり、今や、我々は、太陽系全體を、一つの精密機械のやうに考へ、其の各部の運動を、手に取る如く、非常に正確に豫言することが出来るやうになりました。

たゞに、太陽系だけではなく、今日は、大宇宙の各部分の機構も判明し、すべての天文現象の、原因結果も明瞭になりましたので、宇宙そのものが、一種の偉大なる機械であるときへ考へられるに至りました。

近年、物理学や数学が進歩した結果、學者の中には、宇宙のあらゆる現象を皆只機械のやうに考へる人が非常に多いのでありまして、只、原因さへ知れてゐれば、其の結果は、容易に解き得るものであるといふ思想が、最近まで、みなぎつて居ました。

ところが、學術の進歩は最近まことに眼ざましく、又、目新しい方面にぞしく展開して來ました。相對原理が主唱されて、一般知識上の價值判斷と實在

物認識との間に區別が明らかとなり、又、量子力學が現はれて、自由と因果律との領域も明らかとなりました。尙ほ、恒星界の觀測や研究が徹底した結果、時間や空間の極端も或る程度まで認められるに至りました。

今まで、變化のないものと思はれてゐたものにも、永い眼を以つて見ると變化が認められるやうになり、又、從來は、死んだかのやうに思はれたものも、實は生命的活動のあるものであると知れるやうにも、なりました。

今日、吾々の宇宙研究の結果、宇宙には一定方向へ進む不斷の流れがあり、又、絶大な意志が總ての變化發展を推し進める原動力となつてゐることも、ほゞ明らかになりました。

宇宙は生きてゐます。そして、或る一定の方向に進みつゝあります。それは決して逆行しませぬ。つまり、宇宙は、そのあらゆる内容と共に、不斷に進化の途をたどつてゐるのです。

宇宙には、初がありました。と同時に、この宇宙には終があるのです。

此うした事は、宇宙の一部々々についても言ひ得ます。太陽にも初がありましたし、今後、其の終も必ずやつて來ます。我が地球も、今から約二十億年前に誕生日があつたのでありますし、又、今後、いつかは天體としての終末の日があります。

太陽系も、銀河系も、大宇宙、小宇宙、それごとく、初があり、終があるのです。此の見地から今は萬事萬物を見直す時代となりました。只、機械のやうに宇宙が、原因と結果との間を、只、黙々と往來してゐると見たのは、昔の學者の態度でありましたが、今後は、森羅萬象が皆、營々として、宇宙意志の命ずるがまゝに、生きて進みつゝあると見なければなりません。宇宙には一個の人格があり、目的があり、計畫があると、考へなければならなくなりました。

右は、甚だ短かく總括的な結論でありますが、とにかく、現代の學術の重要な一傾向を暗示してゐます。唯物論といふものは、理學の方面からも其の立場を失ひつゝあるのであります。(一九三八、六、十八、出帆の日)